

茨城高等学校・中学校

校長室だより 2022年11月18日

秋の夜長はミステリー／超個人的『このミス』大賞を開催します

ライトなミステリーファンを自認しています。なぜわざわざ“ライトな”と断りを入れるかといえば、世の中にはミステリー本というミステリー本を読みまくっている、ヘビーなミステリードランカーの方々がいて（いるんじゃないかなと思われて）、軽々しくミステリーファンなどと名乗ろうものなら、「〇〇（作品名）も読まずしてミステリーファンを名乗るなかれ！かぁ一つ！！」と叱られるに違いないので、「ワタクシどもは、ずぶの素人ですけど、ほんのたしなみ程度にミステリーのほうをかじらせていただいております、はい」という超低姿勢のあらわれであると理解していただきたい。

本屋さんに行くと、最初にミステリーコーナーを物色して面白そうな新刊が出ていないかチェックします。仕事がたまっているときなど「買っちゃダメ！今はミステリーを読んでいる時間なんかないよ」というホワイト自分と「買っちゃえ、買っちゃえ、とりあえず買って後で読めばいいじゃん？」というブラック自分がせめぎあい、8～9割の確率でブラック自分が勝利します。

『このミステリーがすごい』大賞を知っていますか？2002年に宝島社が中心となって創設した、国内で発表されたミステリー小説の賞で、略して『このミス』ともいいます。毎年、大賞をはじめとする数々の受賞作が選ばれます。本のオビに「20××年、『このミス』第1位」などと書いてあるのを見るとついつい購買意欲がそそられてしまいます。

今回の「校長室だより」では、筆者が過去数十年間にわたって読み散らかしてきたミステリーの中で、特に面白かった作品を「超個人的『このミス』大賞」と認定して紹介したいと思います。本家『このミス』は国内作品のみですが、筆者が読むのは海外ミステリーの方が多く、和洋とりそろえてのラインナップとしました。当初、ランキング形式も考えたのですが、とても順位がつけられそうにないのでやめました。あくまで個人の好みに偏りまくった末の選考であることを前提に読んでください。

『ジャッカルの日』 フレデリック・フォーサイス

『ジャッカルの日』は、18代フランス大統領シャルル・ドゴール暗殺を請け負った凄腕の殺し屋ジャッカルと、それを阻止しようとするフランス警察の頭脳、ルベル警視の対決を描いたサスペンス小説です。

シャルル・ドゴールは第2次大戦では軍人としてナチスドイツと戦い、1959年、フランス第五共和制で最初の大統領となった人物です。ドゴールが大統領に就任した当時、

フランスは植民地としていたアルジェリアの独立問題を抱えていました。独立をめざすアルジェリア民族解放戦線の動きを止めることはできないと判断したドゴールは、アルジェリアを放棄する政策を進めます。しかし、それはフランス軍部や右派からは“裏切り”とみなされる行為でした。フランスの極右民族主義者によって結成された秘密軍事組織OASは、実際に6回にわたってドゴール暗殺を企てています。

小説『ジャッカルの日』では、ドゴール暗殺にことごとく失敗したOASの幹部が、極秘に外国人のプロの殺し屋を雇うところから物語が動き出します。組織内にはびこるスパイのため秘密の保持ができないOASは、この計画をウィーンの本荘で行われた3名のみの幹部による秘密会議で決定し、実行に移します。選ばれたのは名前も年齢も不詳のイギリス人の殺し屋、暗号名は“ジャッカル”です。

ジャッカルはドゴールの性格や行動を周到に調査し、複数の偽造パスポートや偽造文書を手配して、フランスに入国します。一方で、秘密保持のためローマのホテルを借り切って籠城するOAS幹部たちに不審をいだいたフランス警察は、OASがドゴール暗殺のため殺し屋を雇った事実をつきとめます。しかし、肝心の殺し屋に関する情報は一切不明のままです。フランスの閣僚たちはドゴール暗殺計画の存在をを国家機密としたうえで、野暮ったいしわくちやの背広姿、恐妻家の小男で“フランスの刑事”クロード・ルベルに大統領の暗殺阻止、殺し屋の逮捕を託すのです。

パスポートを使い分け複数の人物になりすますジャッカルに対し、ルベルは堅実な刑事の捜査手法でこつこつと事実を積み上げながらその行動を特定し、しだいにジャッカルを追い詰めていきます。しかし、なぜかいつも逮捕寸前でジャッカルは忽然（こつぜん）と姿を消してしまいます。ジャッカルは、ドゴールが必ず人前に姿を現すある日を暗殺決行の日と定めます。そしてついに、誰にも予想できない方法でドゴールに近づき、大統領をライフル銃の照準器にとらえることに成功するのです…。

ミステリー小説の面白さのひとつは、リアリティーだと思います。『ジャッカルの日』には、もしかしたら実際にこんな事件があつて、歴史の闇から闇へと葬られていたのかもしれない、と思わせる圧倒的なリアル感があります。先に“順位がつけられない”と書きましたが、もしも殺し屋が筆者の頭に銃を突きつけて「最高に面白いミステリーを一作品だけ選ばないと殺すぞ！」とおどしてきたら、「そ、それじゃ、ジャっ…ジャッカルの日をお願いします！（汗）」と答えてしまうかもしれません。

同じく実在の歴史的人物をあつかった作品に、ジャック・ヒギンズの『鷲は舞い降りた』があります。第二次大戦末期、敗色濃厚なナチスドイツの総統ヒトラーは、敵国であるイギリス首相のチャーチルを拉致するという荒唐無稽な作戦を思いつきます。名も知らぬユダヤ人少女を救った答（とが）で人間魚雷作戦の死地に追いやられていたシュタイナ中佐率いるドイツの落下傘連隊14名にヒトラーの密命がくだります。進むも死、退くも死という窮地に追い込まれたながらも、軍人としての勇気と誇りを失うことなく、イギリス特殊空挺部隊ポーランド人部隊になりすましたシュタイナたちは、悪天候の中、チャーチルが休暇を過ごすイギリス・ノーフォーク州北部の寒村に落下傘降下する決死の作戦を実行するのです。

エンターテインメント作品中では絶対的悪とされることの多いナチスドイツの軍人たちで

すが、『鷲は舞い降りた』では一人ひとりが人間的陰影をもった存在として描かれています。『ジャッカルの日』に劣らない傑作だと思います。降下作戦成功の一報を知らせる暗号文“The eagle has landed”がそのまま小説のタイトルになっています。

『ジェノサイド』 高野和明

21世紀初頭、イラク。民間軍事会社の傭兵で、元グリーンベレー（注）のジョナサン・イェーガーに破格の報酬で、ある任務のオファーがあります。難病「肺筋上皮細胞硬化症」をわずらう息子にかかる莫大な治療費のため、ジョナサンは任務を承諾します。ジョナサンを含めて4名の軍事要員によるチームに下されたミッションは「アフリカ・コンゴの森林の奥深く狩猟採集生活をおくっているピグミーの部族が、人類を絶滅させる恐れのある新種のウィルスに感染した。約40名のピグミーの部族および彼らと行動を共にしているアメリカ人の人類学者ナイジェル・ピアースを殺害し、感染拡大を阻止せよ。またその際に“見たこともない生物”に遭遇したら即座にその生物を殺せ」という不可解なものでした。当時、アフリカ大陸は、国と国、部族と部族、無数の武装勢力同士の泥沼の戦乱のさなかにありました。人類を新種のウィルスから“守護”するという意味で「ガーディアン（守護者）作戦」と名付けられた任務を遂行すべく、ジョナサンたちは紛争と殺戮のさなかにあるコンゴへと潜入するのです。

同じころ日本では、創薬化学の博士課程の大学院生、古賀研人のもとに、急死した大学教授の父、誠治からのメールが届きます。ウィルス学が専門だった誠治は、このメールが研人のもとに届くのは自分の身に何かが起こった場合であり、今後、研人の行動、電話やメールはすべて何者かの監視下におかれることになる、と告げます。そして、研人に「アイスクャンデーで汚した本をひらけ」というメッセージを伝えるのです。小学生の頃、父から見せられた化学の参考書を、アイスクャンデーで汚したことを思い出した研人は、その本の中に隠された誠治の手紙から、アパートの一室を利用した秘密の研究室と2台のノートパソコンにたどり着きます。研究室に残されたノートには「PCに内蔵された特殊なソフトを利用して、ヒトの細胞の表面に存在する特殊な受容体、『オーファン受容体』を活性化する薬物を合成せよ」という、誠治から研人への謎の指示が書かれていました。

「ジェノサイド」とは民族、人種などを対象とした集団殺戮のことです。そのタイトルどおり、作品の中ではコンゴやルワンダで発生した集団殺戮の様子が克明に描かれます。また、ナチスドイツによるユダヤ人虐殺や旧日本軍の南京事件にも言及されています。作品を読んでいく中で、同じ種の生物を、これほど冷酷に、残虐に大量殺戮することのできる“ヒト”という種には、生物として何か大きく欠落した部分があるのではないかと、という思いがわき起こってきます。そしてさらに、物語の進行につれて、『ジェノサイド』というタイトルが、もうひとつの別の意味を帯びていることに気づかされるのです。

コンゴの森の奥深く、ピグミーのキャンプに迫った“ガーディアン作戦”の動きを、ナイジェル・ピアースはすべて察知していました。地球上でもっとも厳重なセキュリティーで守られたペンタゴン（アメリカ国防総省）の通信機密網をハッキングしていたのです。その不可能を可能にしたモノは…ネタバレになるので書けません。ピアースはジョナサンたちに、ガーディアン作戦は虚偽であること、作戦終了後にジョナサンたちは全員抹殺

されること、ピグミーたちの殺害の真の目的は、アメリカ合衆国ホワイトハウスが発動した“ネメシス作戦”、人類存続をおびやかすおそれを持つ、ある脅威の排除をめざす作戦であることを明かすのです。

アフリカと東京、一見無関係な二つの物語が難病の治療薬開発という接点を軸に一つの物語として結びついていきます。緻密なプロットとダイナミックな構想が、日本のミステリーの中で群を抜いていると思います。子どもの大学入試につきあって東京に行った時、駅の本屋さんで見つけてカフェで読み始め、一気に読みしてしまった記憶があります。ちなみに『ジェノサイド』は、本家『このミス』で2012年に大賞を受賞しています。

注) グリーンベレー アメリカ合衆国陸軍特殊部隊の通称

『悪魔の手毬唄』横溝正史

1970年代後半、空前の横溝正史ブームが巻き起こりました。『犬神家の一族』『獄門島』『八つ墓村』などが立て続けに映画化され、ブームを後押ししました。先日亡くなった俳優の古谷一行さんが名探偵・金田一耕助役を演じたTVドラマのシリーズも人気を博しました。このブームは、茨城県北部の片田舎で自然に囲まれた毎日を送る素朴なひとりの少年にとっても無関係ではありませんでした。

筆者がミステリーを読むきっかけとなったのは横溝正史です。当時、中学生だった筆者は、横溝作品に“どハマリ”しました。当時、やはり横溝ファンだった友人と文庫本を分担して購入して貸し借りしながら、横溝作品を読みまくりました。中学時代に、角川文庫の横溝正史シリーズ50～60冊をほぼ読破したと記憶しています。振り返ると、我ながらクセが強い中学生だったなあ、と思います。数ある横溝作品の中で、推しをひとつに絞るのは至難のわざですが、しいて選ぶなら『悪魔の手毬唄』です。

昭和30年、金田一耕助が静養のため滞在していた岡山県の端に位置する山村、鬼首（おにこべ）村で連続殺人事件が発生します。東京の芸能界で成功をつかんだ大スター“大空ゆかり”こと別所千恵子の帰郷をきっかけに、零落した庄屋の主人、多々良放庵が失踪し、千恵子の同級生、由良泰子、仁礼文子、青池里子の三人のうら若き乙女たちが次々と何者かに殺害されていきます。しかも、それらの殺人は鬼首村に伝わる手毬唄の歌詞にそった奇妙な方法でおこなわれるのです。

金田一耕助は、友人でもある岡山県警の磯川警部とともに捜査にあたります。事件の背景には、鬼首村の二大勢力、由良家と仁礼家の複雑な対立関係が存在しています。調査をすすめる中で、金田一耕助は、泰子と文子のそれぞれの母親が、23年前、青池里子の父親を殺して姿をくらました恩田幾三という男と関わりを持っていたことをつきとめます。金田一耕助は、今回の連続殺人が23年前に鬼首村で起こった殺人事件に端を発するのではないか、という推理にいたるのです。

“おどろおどろしい”という日本語があります。『悪魔の手毬唄』という作品をあらわすのにふさわしい言葉ではないかと思います。複雑にからまりあう情念の糸が織りなす恐ろしくも妖しい美の世界が横溝作品の魅力です。

『悪魔の手毬唄』に、すずめ色にたそがれた仙人峠で、金田一耕助がひとりの老婆とす

れ違う場面があります。手ぬぐいを姉さんかぶりにして、風呂敷包みを背負う腰の曲がった老婆の「ごめんくださりませ。おりんでござりやす。お庄屋さんのところへもどってまいりました・・・」というつぶやきが金田一耕助の耳にかすかに届きます。“おりん”さんというのは、庄屋の多々良放庵の五番目の妻で、長年離縁されていたのが許されて庄屋のもとに帰ってきたのです。しかし、その後、おりんさんはその年の春に神戸の親類の家ですでに亡くなっていたことが判明します。その八月は、おりんさんの新盆だったのです。

説明すると何てことないかもしれませんが、この場面を読んだ中学生の筆者は、“背筋を悪寒が走る”という体験をはじめてリアルに味わいました。暗い夜道を一人で帰るのが怖くて、二、三日、部活をずる休みして早めに帰宅した覚えがあります。

『悪魔の手毬唄』は、1977年、市川崑監督によって映画化されました。原作の設定は夏ですが、映画では晩秋に変更されています。晩秋の山村の閑寂とした美しさと、手毬唄のものの悲しい調べが心に残る映画です。

『ミレニアム1／ドラゴンツアーの女』スティーグ・ラーソン

“ベタ”ですいません、とあらかじめ謝っておきます。「ミレニアムね、あ～そうきましたか、はいはい」などというミステリー通（つう）の人の声が聞こえてきそうですが、「それでも面白いもんは面白いんだから、いいんでないかい？」となぜか北海道弁で反論してみたいと思います。

ミレニアムシリーズは全世界で1億部以上を売り上げた大ベストセラーです。作者のスティーグ・ラーソンは『ミレニアム1～3』を書き上げた後、その成功を目にすることなく、50歳の若さで他界しました。その後、別の作者が『ミレニアム』の続編を書いています。

小説の舞台は2002年のスウェーデン。裁判の結果、雑誌「ミレニアム」の発行責任者で経済ジャーナリストのミカエル・ブルムクヴィストの有罪が確定します。罪状は名誉毀損（きそん）罪。「ミレニアム」はスポンサーを持たない独立資本の雑誌で、少数精鋭のメンバーによって運営され、経済界の不正を鋭く追求することで知られています。大物実業家ハンス＝エリック・ヴェンネルストレムによる巨額の公的資金流用の情報をつかんだミカエルは、「ミレニアム」に告発記事を掲載するのですが、ヴェンネルストレムの逆襲にあい、訴えられて敗訴するのです。

三ヶ月の禁固刑と巨額の賠償金の支払いを命じられ「ミレニアム」を去ることになったミカエルのもとに、スウェーデン実業界の大物、ヘンリック・ヴァンゲルから調査員として雇用したい、との申し出があります。依頼内容は、四十年以上前に行方不明となったヘンリックの姪、ハリエット・ヴァンゲルの捜索です。一族経営の巨大企業ヴァンゲルグループの元会長ヘンリックは、親族たちを信頼していません。何の前触れもなく突如姿を消したハリエットが親族の誰かに殺されたに違いないと考える82歳のヘンリックは、愛する姪を殺した犯人が誰か、ミカエルの調査能力を生かして突き止めてほしいというのです。そしてヴァンゲルは、一年間の調査に携わるという契約にミカエルが同意すれば、調査期間の終了後に、賠償金の支払いを可能にする多額の報酬と、ヴェンネルストレムの不正を

明らかにする証拠を示し「彼の首を皿にのせて差しだす」ことを約束するのです。

十数年ぶりに『ミレニアム』を読んでみました。やっぱり面白い。ミステリーは、犯人が誰か考えながら読む初読も楽しいですが、犯人がわかったうえで、物語にはりめぐらされた伏線を発見しながら読む2回目、3回目の読書も面白いものです。

ミステリーを面白くする要素の一つに個性ある登場人物の存在があります。『ミレニアム』には、天才ハッカー、リスベット・サラデルが登場します。身長150cmそこそこの痩せぎすの少年のようなこの24歳の女性は、首にスズメバチ、背中から腰にかけてはドラゴンのタトゥーを施し、黒のジーンズに革ジャンがトレードマークです。感情表現が極端にとぼしく、他人に心を許さず、子ども時代から自分に危害を加えた相手には凶暴な暴力で復讐してきました。成長しても社会との協調性を持つとしない彼女は、精神疾患、知的障害があると見なされ、後見人をつけられますが、実は驚異的な情報収集能力と解析力の持ち主です。警備会社の調査員の職を得た彼女は、高性能のPCを武器に、調査対象の人物の秘密をあばき出すことにかけて天才的な能力を発揮します。

ふとしたことからミカエルの調査に協力することになったリスベットは、ハリエットが残した聖書の章、節を記したメモから、人種主義に根ざした、女性たちを標的とした凶暴で巨大な暴力の存在を明らかにしていきます。リスベットはやがて『ミレニアム』という物語の主旋律を奏でる存在となっていくのです。

スウェーデンやノルウェーなどいわゆる北欧諸国は、優れたミステリーを数多く生みだしてきたことで知られています。北欧ミステリーと呼ばれるそれらの作品は、重厚で緻密なストーリーが特徴です。厳しい冬、北欧の人たちは明々と燃える暖炉のそばでミステリーを片手に長い夜を過ごすのかもしれませんが。筆者は最近では、『制裁』アンデシュ・ルーストンド&ペリシエ・ヘルストム、『九つ目の墓』ステファン・アーンフェ、『アトム・トラベリング・アローン』サムエル・ビョルクなどを面白く読みました。

『向日葵の咲かない夏』道尾秀介

「超個人的『このミス』」に含めるべきかどうか一番悩んだ作品です。ミステリーの中には、トリックアートのように読者を“だます”タイプのものがあります。最後の最後にどんでん返しの結末を迎えるタイプです。『向日葵の咲かない夏』はその典型で、読み終わった時、「あっ・・・やられた」としばし呆然とした記憶があります。思わず最初から読み返して確認したくなる作品です。

夏休み前の最後の登校日の放課後、小学生の「僕」は欠席したS君の家にプリント類を届けに行き、そこでS君の死体に遭遇します。学校に戻った「僕」から話を聞いた担任の岩村先生は、警察と共にS君の家に向かいますが、S君の死体はどこかに消えてしまっていました。そのころ「僕」の暮らす町では犬や猫が不可解な形で殺される事件が頻発しています。S君を殺害した犯人を岩村先生ではないかと考えた「僕」は、妹のミカ、小さな蜘蛛に生まれ変わったS君とともに事件の謎に挑むのです。

グロテスクで不気味な描写が多く、「よい子のみんなはぜひ読んでね」とは言いにくい内容です。読み終わった後味も爽快感とはほど遠く、陰鬱（いんうつ）な気持ちになるこ

と請け合いです。しかしながら、ミステリーとして秀逸であることは間違いないと思います。おすすめはしません。読みたい人は自己責任でお願いします。本家『このミス』2009年大賞受賞作です。

『クリスマスに少女は還る』キャロル・オコンネル

クリスマスを間近に控えた日、ボート小屋で二人の少女が行方不明になります。ニューヨーク州副知事を母に持つグウェン・ハブルと、その親友で、両手で血みどろのはらわたをつかみ地べたをのたうちまわる“どっきり”で友人を怖がらせるのが趣味の、ホラーマニアの問題児、サディー・グリーンです。警察は、二人の少女は何者かに誘拐されたと結論づけます。

この誘拐事件を捜査することになったルージュ・ケンダル刑事は、並外れた知能指数を持ち、学生時代は天才少年として名前を知られた存在でした。彼の双子の妹スーザンは、十五年前のクリスマスの前に、やはりもう一人の別の少女とともに誘拐されました。そしてクリスマス当日、遺体となって発見されたのです。スーザンを殺した犯人は、現在、刑務所で服役中です。十五年前そっくりの事件は何を意味するのか、誰の手によるものなのか、物語は読む人に謎解きを挑んでいきます。

ルージュの前に、顔半面にぎざぎざ模様の傷のある美女があらわれます。彼女はルージュに、あなたの過去を知っている、と謎めいた言葉を残して去ります。後日、警察の捜査会議で女に再会したルージュは、彼女が法心理学者として少女誘拐事件の捜査に加わるアリ・クレイ博士であると知ります。物語がすすむにつれて、アリが十五年前のスーザンの事件に深い関わりを持つ存在であることが明らかになっていきます。

一方、誘拐されたグウェンは、見知らぬ部屋で目を覚まします。薬物で眠らされて監禁されていたのです。知恵と勇気をふりしぼり洗濯物入れのシューターから脱出したグウェンが行き着いたのは、キノコを育てる奇妙な地下室でした。封鎖された地下室で、グウェンは獰猛な大型犬の襲撃を受けます。そのとき誰かが、棒で犬を撃退し、犬をつなぐ鎖が届かない所まで、グウェンを突き飛ばして助けてくれます。その直後、グウェンが目にしたのは、すさまじい剣幕で吠える犬を前に高らかに笑うサディー・グリーンの姿でした。こうして地下室の闇の中で、グウェンの命をねらう誘拐犯と二人の少女の戦いが始まるのです。

『向日葵の咲かない夏』同様に、この小説の結末にも大きなどんでん返しが待っています。しかし、同じどんでん返しでも、その読後感はだいぶ異なります。驚きとともに静かな感動がこみあげてくる、と言えば伝わるでしょうか。文庫本のオビに「後にも先にもこんな物語に出会ったことがない」と紹介者の言葉が書かれていましたが、決して大げさではないと感じました。この作品を読んでキャロル・オコンネルのファンになりました。

まとめと反省

今回の「校長室だより」ですが、趣味の方向に全力疾走した結果、8ページにおよぶ史上最長記録を更新してしまいました。辛抱強く、最後まで読んでくれた生徒諸君に感謝します。

一時期、「本を読まない大学生」が話題となったことがありますが、それは中学生や高校生にもあてはまる問題だと思います。以前、大学入試の模擬面接をおこなったとき、「最近読んだ本の中で、感動した本は何ですか？」という質問に「中2の時に読んだ『坊っちゃん』です」と答えたA君（高3）の回答が忘れられません。

読書が苦手という人は、まだ本当に面白い本に出会っていないのではないかと思います。何を面白いと思うかは人それぞれですが、ミステリーはそのきっかけとなるかもしれません。

最後に、今回の「校長室だより」で紹介した作品に関して、「読んでみたがあまりおもしろくなかった」、「テスト前に読み始めたら止まらなくなって、成績が下がってしまった」などのクレームは一切受け付けませんのでご了承ください。

また、「今回の選考に、〇〇（作品名）が選ばれていないのはいかがなものか？」という、全日本アガサ・クリスティ協会、スティーブン・キング推進協力会議日本支部、松本清張研究協議会、東野圭吾読者のつどい等の皆さまからのご意見は、固く遠慮させていただきます。（完）

【今回の「校長室だより」で紹介した本】

- 『ジャッカルの日』 フレデリック・フォーサイス（角川文庫）
- 『鷺は舞い降りた』 ジャック・ヒギンズ（ハヤカワ文庫）
- 『ジェノサイド』 高野和明（角川文庫）
- 『悪魔の手毬唄』 横溝正史（角川文庫）
- 『ミレニアム1／ドラゴンタトゥーの女』 スティーグ・ラーソン（ハヤカワ文庫）
- 『制裁』 アンデシュ・ルーストンド&ペリシエ・ヘルストム（ハヤカワ文庫）
- 『刑事ファビリアン・リスク／九つ目の墓』 ステファン・アーンフェ
（ハーパー BOOKS）
- 『オスロ警察殺人課特別班／アイム・トラベリング・アローン』 サムエル・ビョルク
（ディスカバー文庫）
- 『向日葵の咲かない夏』 道尾秀介（新潮文庫）
- 『クリスマスに少女は還る』 キャロル・オコンネル（創元推理文庫）

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。